二週目の勇者「俺」

ジャッカル東西田

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
二週目の勇者「俺」

【Ｎコード】
Ｎ９０５３Ｚ

【作者名】
ジャッカル東西田

【あらすじ】
最強の勇者としてゲーム世界に転生してしまった主人公であったが、既に大魔王も倒しエンディングも迎えてしまっていたので特になにもやることが無かった。そんな勇者のこころは荒んでいき……

暇つぶしの午（ひる）（前書き）

主人公が外道です。
心温まる会話も展開も特にありません。
ファンタジー要素もあまり……という胸糞悪くなる話なので、特殊な性癖の方のみお進み下さい。

暇つぶしの午（ひる）

「ヒャッハァー！種もみを隠そうったって無駄だぜぇー」
世は大凶作時代。俺は叫んでいた。天にも地にも誰にも恥じることなく。
鉄塊号（馬）の上に乗ったまま、必死に抵抗するヒゲを生やした爺さんから小汚い袋を奪い取る。
「ちッ！何だこれだけかよ？時化てやがんな～」
袋の中身を確認し俺は鉄塊号から爺さんにツバを吐いた。
「お、お願いですじゃ。それは村衆が食べるのを我慢してなんとか用意した来年の為の種もみなのですじゃ！　返して下され、返して下されー」
爺さんが俺のあぶみに手をかけてくる。チッうぜえな。
「あー分かった分かった。返してやるよ」
手に持った小袋を爺さんに差し出す。爺さんはホッとしたのか暴れるのをやめ袋に手を伸ばした。爺さんが袋を掴みかけたその瞬間
「フレイル！」
俺は炎術系魔法を発動。
袋はその中身ごと燃え上がった。
「ヒャーッハッハッハ？　返してやったぜえ？お空になあ？」
呆然とする爺さんを尻目に俺は馬首を翻し荒野へと駆ける。

風が心地いい。
身を切るようなこの風が。
赤い岩棚、砂埃、植物も生えぬ大地。
（嗚呼、ここには余計なものはなに一つ無い）
そう感じながら
「勇者なんて……糞喰らえだ」

そう小さく漏らした彼の独り言は風の中に消えていった。

魔王との謁見（18度目）

「お待ち下さい。少しお待ち下さい？」
そんな声をかけてまとわり付いてくる門番を無視し俺は扉を開いた。

「魔王ちゃーーん、遊びに来たよ～～～」
玉座に優雅に腰かけワイングラスを片手に持ったポーズのまま魔王は口からワインを噴出した。
「キッタネエな～！あ、それはそうと部下に魔王城の掃除ちゃんとさせてる？埃（ほこり）が積もってたよ」
ひとしきり噎せた後、魔王はぎこちなく笑顔をつくる。

「ゆ、勇者殿。ほ本日はどのような御用件で我が城においでに？」
ビクビクとしながら聞いてくる。愛い奴め。
「なんだよ～～用がなけりゃ来ちゃいけねえのかよ～？魔王（おまえ）と俺は親友（マブダチ）じゃなかったのかよ～～～？」
「い、いえ！そんなことは決して。勇者殿と我が輩は義兄弟の契りを交わしておりますればッ？」
ぶんぶんと首を降り否定する魔王。愛い奴め！

「ふ～ん、そうか……ならコレ分かるよな？」
そう言って俺は気を溜めた。この魔王城を一瞬で消し去るほどの闘気を。
それを見た魔王はガクガクと膝が震え王座から転げ落ちた。
側近である門番は口からブクブクと泡を出し気絶している。
「……ふぅ」
俺は展開していた闘気を身体の内に抑え込み魔王に笑いかける。

「あ、あの勇者殿……これは一体なんな「アゲぽよ～～！」ので」
魔王が喋っている途中で俺は割り込む。
「はっ？」
魔王はよく聴き取れなかったのか間抜けな声を出した。
「おい！『アゲぽよ～』って言われたら『アゲぽよ～』って返さなくちゃ駄目だろうがッ？」
「ヒイッ！」
俺の剣幕に怯える魔王。

「はぁーっ……怒ってないから言ってみ？『アゲぽよ～』って俺に返してみ？」
深く溜息をつきながらも、本来なら打ち首の所を聖母のような慈悲深い笑みで諭す。そんな俺の威容に打たれたのか
魔王はこくこくと頷くと
「あ、アゲぽよ……」
なんとか挨拶を返した。しかし
「違うッ？もっと元気よく！『ぽよ～』の後ろに！（ビックリマーク）を三個付けるくらいな気持ちで？」
俺は頭を掻き毟りながら指導。しばらく
「アゲぽよ～～」
「違うッ？」
「あ、アゲぽよ～！」
「ちょっと良くなった！」
「あげぽよ～～！！」
「惜しいッ？『アゲ』は『あげ』にしなくても宜しい！」
「『アゲぽよ～！！！』」
「それダッ？」
こんな風景が魔王城に出現した。

一息ついた後
「あの勇者殿、先ほどの『アゲぽよ〜！！！」には如何なる意味が？やはり直前に勇者殿が凄まじい闘気を溜めておられたように極大呪文か何かの詠唱なのですか？」
魔王は心もちワクワクした様子でこちらに尋ねてくる。

（さて、どうしたものか？……ここまで期待している魔王に真実を話すのは余りに酷だ。しかしさりとて「これはスンゲー呪文なんだぜッ！」と欺くのも胸が痛い。ここは……）

「やはりイオナゾン級以上の破壊力なのでしょうなあ……いや、私も1時間以上勇者殿に特訓していただいた甲斐があるというものです！今から使うのが楽しみですな！ハッハッハッ？」
魔王の瞳は子どものようにキラキラと澄んでいた。

そんな魔王に俺は小さな声で
「……ない」
「はい？勇者殿なんですか？」
一旦笑いを納め、こちらを見つめる魔王。その瞳が相変わらず綺麗に澄んでいたのでイラっと来る。

「意味など……ないッ！極大呪文でもない。というか呪文ですらナイ？俺はもう帰る、不愉快だ？あとそれと怪物（モンスター）共にキチンとこの城を掃除するように伝えておけッ！貴様の城の埃（ほこり）を吸い込んだせいで一秒でも俺の寿命が縮まったなら、貴様ら全員悪虐の限りを尽くし拷問にかけるからナ」
魔王にそう告げ腹パン。疼くまる魔王を置いて謁見の間を出る。

ムカムカしていたので、とりあえず魔王城の窓ガラスを釘バット状の武器『穢簍剥剃梦酢（エルムスムス）』で叩き毀してから自宅に帰り、魔王からパクッた酒を片手に不貞寝した。

魔王との謁見（１８度目）（後書き）

「あげぽよ」回です。
人の話を聞かない奴って面倒ですよね。
なんか突然怒りだしたりとかね。

ダイヤの糞を捻り出せ！

「いいかッ？凡夫勇者パパの精液がシーツの染みになり、淫売僧侶ママの割れ目に残ったカスがお前らだ？じっくり可愛がってやる、泣いたり笑ったり出来なくしてやるッ！」
東トルキス大帝国。その中にひとつしかない国立勇者士官学校の訓練用地で俺は教鞭をとっていた。

訓練風景を見渡す俺。の座る『椅子』から
「ギギギギッ」
という歯軋りのような音が聞こえてくる。
「どうした『勇者見習い一号』改め『凡夫見習い一号』。苦しいのなら降りても構わんのだぞ？」
ｏｒｚのような態勢で俺を背中に載せた勇者見習いは叫んだ。
「レンジャイ？この程度何でもありません、レンジャイッ？」
日中の気温が３５℃を超えるなか早や２時間。なかなか根性のある凡夫だ。
「痛ぶり甲斐があるのは感心だ。初心者の森に行ってゴブリンをファックしてきていいぞ！」
「レンジャイッ？有り難う御座」
そう言って勇者見習いは微笑みながら崩れ落ちた。どうにも限界だったようだ。

国立勇者士官学校。
１６歳を迎え『天の声』から啓示を受けた帝国中の男子を集め
「清く、正しく、美しく！」
を合言葉にプロの勇者になるまで４年間厳しい訓練を課す勇者見習いの為の養成所である。

学費は国王から出ており無料だが、啓示を受ける者が年に４～５人しか出ない為に強制入学のうえ退学は許されない。
先輩・教官には絶対服従。
座学以外は学年合同で行われる。

俺は週に二度、この国立勇者士官学校で特別教官などを務めている。
まあさほど金になるわけではないが、イケメンリア充の上に生まれ落ちた瞬間神から祝福されたという才能溢れるフザケた勇者どもに
『如何に自分が甘ったれた存在であるか？』
という挫折感を味合わせるのはそれ程悪くはない。

努力すれば大抵の事が叶う人種に
「努力してもどうにもならぬことがある」
と教えるのは大切なことだ。
そうすれば自分よりも価値が下の人間に優しくなれるし、尊大で横暴な振舞いもなくなるからだ。
ゆえに俺は奴らを『クソ以下』として扱うのである。

「『魔物マラソン』程度にいつまで俺の貴重な時間を割く気だ？さては貴様ら『勇者』ではないなッ？スライムのクソを掻き集めた値打ちしかないウジ虫どもッ？」
砂漠のような勇官校第七特別訓練用地。
熱い。そこに居るだけで灼熱のように暑い。
走ろうとすれば足が砂に取られ、また『蟻地獄』などの危険な怪物も自生しているので本来は隊列を組んだ上でゆっくりと進むのが正しい。

しかし、俺はそこをフル装備（フルアーマーで剣盾担ぐ）のまま４０ｋｍ走らせる。おまけに魔王から借り受けた魔物に勇者見習いどもを追わせているのだ。

結果、阿鼻叫喚！
気絶する者、淫売僧侶（ママ）に祈り出す者、逃走しようとする者も現れた。
そして、見事ゴールした猛者どもは俺の椅子にしてやる。

「貴様ら勇者が説く『友愛の心』だ！まさか仲間が未だ苦しんでいるのに自分だけゴールしたから終わりなどと思っていまいな？」
そういうと大抵勇者見習いどもは
「ぐぬぬぬぬッ！」
といった後しぶしぶ俺の椅子になるのだ。

（いやぁ～『友愛』って本当にイイもんですね！）

更に１時間後
「死ぬか？俺のせいで死ぬつもりか？魔王は待っちゃあくれないぞ？とっとと死ねッ？」
かなりの人数がクリアしたが落ちこぼれどもはまだゴール出来ちゃいなかったので発破をかける。

そしてなんとか全員ゴール。
勇者見習いどもは涙を流して全員で喜び合う。
「へへへへ、あいつら胴上げまでしてやがる」

熱い友情に俺の目にも感動の涙がちょちょぎれる。
ま、全員クリア出来なきゃ連帯責任でもう一度死ぬまで追い込み掛けるからだけどな！

勇者のシノギ　其の一

「今日こそ『ここ』から退去(でて)いってもらうからな！」
打ち合わせ通りのセリフが俺の待つ通りにまで響いてくる。
「嫌です！『ここ』は主(しゅ)が住まう家です。邪悪な者、あなたこそ出ておいきなさい！」
女の叫ぶ声。に混じり小さな子どもの泣き声も聞こえてくる。
うるせぇなたく。
「そうは烏賊のコンコンチキ。土地の権利書はこっちにあるんだ。それに今日は凄いお方を呼んである……」
まったくひどい三文芝居だ（脚本俺だけど）

「総代(せんせエ)！総代(センセェー)お願いします？」
やれやれ、行くか。

俺はゆっくりとその【教会】へと入っていった。
「ゆ、勇者様ッ！」
俺を見たまだ若いシスターは驚きの表情を浮かべた。
それはそうだろう。第一級勇者なんて滅多に見られるモンじゃない。天然記念物級だ。
「へへ、センセエすいやせん」
黒服の男が頭を下げる。俺は銀縁眼鏡をかけた黒服の肩にポンと手を置き
「さて、何やら騒ぎになっているようだが……この『勇者』が解決しよう」
『勇者』の部分をことさら強調し【仕事】にかかった。

おっぱいのでかい（パイオツカイデー）のシスターは語った。
この教会で親を亡くした身寄りのない子どもたちを育てていること。
ある日、賭事好きの前司祭が教会の土地の利権書を持って蒸発したこと。
翌週から黒服の男たちが現れ利権書を盾に立ち退きを迫られていること……

「ふむ……教会だけでなく孤児院のようなこともしている訳か」
顎をさすりながら餓鬼どもを見る。なるほど、どいつもこいつもキッタナイ格好をしているわけだ。
「はい勇者様の仰る通りです。ここは『空神ゼルデアス』を祭る教会でもあるのですが、行き場のない子どもたちの安息の場でもあるのです」
鋭い目で銀縁眼鏡を責めるように見ながらパイ乙カイデーは訴えてくる。
「なのに…この黒服の男たちは窓から蛇を投げ入れてきたり、薬屋や武器屋から私達が頼んでもいない薬草や武具を届けさせたり、挙句の果てに拡声魔法を使ってわ、わたしの胸のことを『男を惑わす魔乳』と悪く言ったりして……」
「そいつはヒドい」
間髪入れず俺は顔をしかめた。半笑いになりそうな顔面の表情筋を抑えるのに苦労する。
（それ全部俺の指示したモンだしなあ）
と思いながら……

～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～

「窓から蛇（スネーク）」
【地上げ】の初歩の初歩だ。読んで字の通り、目標（ターゲット）の家の窓から蛇型の怪物（モンスター）を投げ入れたり、亜種として郵便ポストっぽい所にイモ虫を大量にぶち込んだりしておく。
女性によく効く。

「ピザ屋にイタ電」
この世界のデリバリーを頼める飯屋・雑貨薬草屋・武器屋などから目標（ターゲッツ）へ「何故か」大量に注文が届けられるという代物だ。
これをやられると地味に困る。
（この世界にピザ屋はない。電話もないが）

「騒音おばさんゴッコ」
本来なら黒塗りの街宣車のようなもので目標（ターゲット）の家の前に堂々乗り付け、スピーカーから延々と目標の人格攻撃（悪口）を繰り広げるものだ。この世界では拡声魔法を使えるので、それで悪口や恥ずかしい過去を余すことなくご近所にお伝え出来る！
亜種として目前で洗濯ものなどを叩きながら
「引っ越し！引っ越し！さっさと引っ越し？シバくぞ？」
と法に引っかからぬ様にヤルのも善い。
この場合ヤる方、ヤられた方双方に大変な精神疲労をもたらす高等テクニックである。

ちなみにすべて俺が元いた世界から持ち込み伝えたモノだ？
～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～

「本当かねチミィ？」
俺は銀縁の方へと顎をしゃくった。
「……確かに行過ぎた行為があったことは認めます。しかし、これも自分達の仕事なのです！土地売りが土地を手に入れられなければ飯の食いあげになってしまう！勿論土地の権利書は【合法的】に手に入れたものです？」
【合法的】の前に【ＩＫＡＳＡＭＡギャンブルで】が抜けとるよ。
「た、確かにそちらの言い分もあるでしょうが……『土地の利権書』はそちらにあっても『教会の利権書』はこちらにあります！いきなり出ていけは失礼でしょう？」
我に理は有りとばかりに【教会の利権書】を俺に見せるシスター。
「ふぅ……」
（バレないようシスターの乳を横目で盗む見ながら）書類に目を通した俺は困ったようにわざとらしい溜息をついた。

問題をややこしくしているのは土地と教会の権利が別であるという点である。
「この岩の上にわたしは教会を創ろう」
とこの世界の神（バカ）が言ってから、岩（とち）は人の物だがその上に建つ教会はバカの物と決まっているからだ。
故にこのような諍いが発生するのである。
そして、そこに俺のような「清く正しく美しい勇者」の諍い調停人に出番が回ってくる。双方の言い分を聞きどちらが正しいのかを決するのである。が、どちらかというと今は【教会】の方が身びいきされている。
単一の教会は怖くなくともバックにいる【大聖堂】の威光は絶大だからだ。
その証拠に俺が登場してから牛スターは若干安堵しているし、餓鬼どもは俺にキラキラとした瞳を向けてくる。うぜえ。

「ではこうしてはどうでしょう？まず乳。じゃなくてシスターが教会の権利書を地上げ屋さんにお売りして、然る後地上げ屋さんはわたしにこの教会と土地を売る。そしてわたしは神の欲するところを為す……というのは？」
俺はスライムを半日いたぶる時のような優しい微笑を浮かべて二人に提案した。
「えーと、自分はそれで一向に構いませんが……」
銀縁が戸惑った演技をしながら第一に賛成する。脚本通りだ。
「ゆ勇者様！それはもしかして？」

TO　BE　CONTENUE

勇者のシノギ　其の一（後書き）

今年最後の投稿です。
来年加筆します。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n9053z/

二週目の勇者「俺」

2011年12月31日19時45分発行